

『残声をのぞく』

大学に入学したとき、成人式、就職が決まったとき、同窓会の前……いや、別に何もな
いときにも、僕にはよく中高の卒業アルバムを見返すことがあった。

理由は多分、忘れてしまわないため。疲れているとすぐに忘れてしまいそうになる。当
時、僕を助けてくれた仲間の顔と名前、生まれて初めて夢をくれた先生、あのときの感情
がすべてなくなろうとする。

無駄に厚いページをめくっていく。

集合写真に自分の写っている姿はない。クラスの個人写真にだけぼんといて、何とも
言えない無表情で退屈そうにしている。思い返せば、こんなものだったかもしれない。つ
まらなく、独りだけおかしな方向に捻くれ、誰とも関わろうとしなかった。

ほんとは助けてくれた仲間も、夢をくれた先生も、いなかったんじゃないか？

眠れない深夜を過ぎた名前のない夜、シャッターが閉まっているはずなのにカーテンの
隙間からは冷気が差し込む。ため息はアルバムの写真を曇らせた。白く濁る思い出の中で、
僕以外のみんなが楽しく過ごしているような気がした。

「仕方ない。全部、いらないと思ってたから。きつと、みんなも忘れてる」

もう見たなくなり、一気に終わりまで飛ばす。しかし、最後のページには仲間や先生
のメッセージが書かれていた。

「頑張つて、とかよく言うけど、頑張ってるわ！」「マジで楽しかったです。嘘じゃない
よ？」「俺らは消極的なことに積極的でいような」「う〇ち〇」「↑おいっ！　これ書いたや
つ殴る」「卒業アルバムで会話すんな」「ちゃんと喋れよ独創性」

声が見えた。

「なんだ、みんなも捻くれてんじゃん」

返答するようにぼそつと呟く。

上瞼がきゅつと熱くなり、鼻がツンとする。

『忘れねえぞ！』

みんなのそろった声で手が振動し、温かくなる。シャッターを開けると、眠れなかった
僕を残念でしたと馬鹿にするように、太陽は昇ってきていた。

卒業アルバムを見返すのには、そういうえば、もう一つ理由があった。

勇気をもらうため。

残声をのぞく

2025 年 3 月 20 日 執筆

著 者 やさかれい
八坂 零

掲 載 芸術の星座
